

EPP の解釈

塩原佳世乃

はじめに

Extended (part of) Projection Principle (拡大投射原理、EPP)は Chomsky (1981,82)以来さまざまな定式化が試みられてきたが、その「解釈」については未だよく分かっていない。本稿は「言語能力の遺伝的基盤を言語固有でない一般原則とインターフェイス条件から帰結しようとする」ミニマリスト・プログラムの研究方策 (Chomsky 1995 et seq.)のもとで、EPP がどのようにインターフェイスで解釈されるのかを探る。その際(1)に示す3タイプの虚辞に関わる文(具体的には(1'))に対する Radford (2009: ch.7, 以下 R)の素性照合に基づく(長距離) A 移動分析を参照しつつ修正する。

- (1) a. 虚辞を含まない、すなわち DP が主節の[Spec, TP]まで移動する例。
- b. DP が基底生成位置にとどまり、虚辞を含む例。
- c. DP が埋め込み節の[Spec, TP]まで移動し、虚辞を含む例。
- (1') a. [Several riots] are believed to have occurred in Hong Kong.
- b. [There] are believed to have occurred [several riots] in Hong Kong.
- b'. ^{??}*[It] is believed [there] to have occurred [several riots] in Hong Kong.
- b''. ^{??}*[There] are believed [there] to have occurred [several riots] in Hong Kong.
- c. ^{*}[It] is believed [several riots] to have occurred in Hong Kong.
- c'. ^{??}*[There] are believed [several riots] to have occurred in Hong Kong.

虚辞の存在により EPP を θ 理論に帰すことができないのは明らかであるため(Chomsky 1981, 82)、EPP に意味的動機付けを求めるのは適切ではない。本稿は、EPP が(2)のような音韻的動機付けを持つことを主張する。

- (2) EPP は CP の左端の音韻句を決定する。

Radford の分析とその修正案 : EPP の音韻的動機付け

Radford は理論内部の理由により defective T に[u-Pers]を仮定するが (R: 263-264)、本稿では T1 は[u-Num]のみならず[u-Pers]も欠くと考え、(1'a)における DP の埋め込み節[Spec, TP]への移動は純粋に[EPP]の要請によって起こると主張する。これは defective T の意味的性質を考えると妥当であり、(1'b-b'')についてもより統一的な説明を与える。

(1'b)の派生において注意すべきは *there* の持つ[u-3Pers]の役割である。R は「*u* 素性は完全な ϕ 素性を持つ要素と素性照合する際に削除される」という Completeness Condition を仮定し、それにより *there* の[u-3Pers]は基底生成位置での素性照合では削除されず、そのため *there* は active であり埋め込み節の T の[EPP]の対象となるという議論を行っている(R: 268)。関連して、もし *there* の[u-3Pers]が初めの素性照合で削除され移動できなくなると、(1'b')あるいは(1'b'')のような虚辞を2つ含む例が誤って生成されると指摘する(R: 267-268)。しかしもともと defective T が[u-Pers]を持たないとすれば基底位置での素性照合は起こらずこのような問題は生じない。また、容認不可能な(1'b', b'')のような例は、Completeness Condition のような ad hoc な制限を仮定しなくとも、主節の[Spec, vP]に併合され主節 T の[EPP]のために[Spec, TP]へ移動する虚辞の持つ *u* 素性が照合・削除されずに派生が破綻する、という独立の理由で排除されうる。

(1'c)では、まず埋め込み節の T の[EPP]が DP を[Spec, TP]へ移動させ、次に主節の T と主節の[Spec, vP]に併合される *it* との間に素性照合が起こり T の *u* 素性が削除される。よって主節 T と DP との間に素性照合は起こらず、DP の[u-Case]が残り派生は破綻する。一方 [u-3Pers]しかもたないと仮定する虚辞 *there* を含む(1'c')では、主節における素性照合で T の[u-Num]が削除されずに残り、T と DP の間に ((1'b)と同様に長距離の)素性照合が起こり、誤ってこの文は容認可能であると予測される。実際(1'c')の容認性の判断には母語話者間で揺れがあり「ほぼ容認可能」(“?”で示す)とする話者もいたのは興味深い、(1'b)と比べると容認性の差は明らかであり説明を要する。以下、(1')の分析における[EPP]の役割に注目し、この問題に対する解決案を提示する。

容認可能な(1'a,b)の派生においては[EPP]により移動した構成素の最終着地点は主節の[Spec, TP]であるのに対し、非文においては埋め込み節の[Spec, TP]となっている。ただし、埋め込み節が CP である場合は DP の最終着地点が埋め込み節であっても構わないため(e.g. *It is believed that there have occurred several riots in Hong Kong, It is believed that several riots have occurred in Hong Kong.*), EPP は基本的には C の持つ性質であって、それが T により共有された場合に[Spec, TP]を移動の最終着地点とすると言える。一方 T 単独の[EPP]は移動を誘発するものの移動した構成素がそこに留まることを許さない。この一般化の背後には、(2)にあるような「CP

節の始まりを音韻的に明示する」という音韻的動機付けがあると考えられる。

「[EPP]は節の始まりを音韻的に明示する効果を持つ」という観点から(1')の例を振り返ろう。(1'a)では、(3a)に示すように、Tの[EPP]により基底位置から主節CP下の[Spec, TP]に移動したDPがCPの左端の音韻句を形成する。(1'b)では、(3b)に示すように、Tの[EPP]により基底位置から主節CP下の[Spec, TP]に移動した虚辞がCPの左端の音韻句を形成する。また、埋め込み節がthat節の場合は、(3c)に示すように、埋め込み文Tの[EPP]により基底位置から埋め込み節CP下の[Spec, TP]に移動した虚辞あるいはDPが、埋め込み節CPのC, thatとともに音韻語を形成し、さらに音韻句を形成する。

- (3) a. [_φ DP][T...]
b. [_φ expletive-T][...]
c. [_φ C-expletive/DP][T...]
- (4) *[_φ][T...]

(3)に示す英語の主語の音韻句構造は、Dobashi (2017 et seq.)の提案する統語構造の外在化のメカニズムに基づいており、Nespor and Vogel (1986)の理論などが予測する英語の音韻構造に基本的に合致する(詳細はSato and Dobashi 2016, Dobashi 2017, 2020a,b やそこで挙げられている文献も参照のこと)。(3a), (3c)のように、通常英語では主語句DPの右端に音韻句境界が現れる。主語句が存在しない場合は、(4)のようにその音韻句が空となり不適格となる。このようにして「節は主語を持つ」というEPPが捉えてきた事実は、統語構造をどのように音韻的に解釈するかという観点で、(2)のように捉え直される。

次に容認不可能な(1'b',b''),(1'c,c')であるが、これらは、虚辞あるいはDPが基底位置から埋め込み文の[Spec, TP]に移動しそこに留まることで派生されてしまう。これらの例では、そもそも埋め込み節のTは[EPP]を持たないと考えられよう(as in Chomsky 1998)。

まとめると、(i)英語の通常のTは[EPP]を持つがdefective Tは[EPP]を持たず、(ii)EPPは(2)のような音韻的動機付けを持ち、(i)と(ii)が(3a-c)を許容し(4)を排除すること、すなわち(1)の3タイプの例の容認性を決めていることがわかる。

帰結

上に示した分析のポイントは、EPPと素性照合を切り離し、[EPP]は他のu素性の有無に関わらず一番近いDPを移動させるという点にあった。これは前者が基本的に1つの構成素を対象とするのに対し、後者が複数の素性を対象にしうるという両者の根本的な差異を考えても自然なことである。また(2)の主張により、(5a)にある音韻的特性、また(5b)にある類型論的一般化が導かれる。

- (5) a. EPPはPF pied-pipingを伴う。
b. EPPは節の左端にDPを持つ言語のみに見られる現象である。

Chomsky (1981, 82)のようにEPPが統語的な要請として捉えられる場合は、例えば*pro*, *PRO*のような音形は持たずとも統語的素性を持つ要素であればEPPを満たすことが予測されるが、(2)はそうではない(関連する議論についてはLasnik (2001, 2003)やLandau (2007)を参照)。次に(5b)についてであるが、Dryer and Haspelmath (2013)によると、主語を義務的に持つ言語のほとんどが主語を先頭に持つ言語、すなわちSVO, SOV言語に分類される。この事実は、EPPが節の“左端”に主語DPを要求し、その結果として(3)に示される音韻構造を派生するというここでの議論に合致する。(3)は英語、すなわちSVO言語を想定しているが、左端にS(主語)があることがポイントであるため、SOV言語にも適用されるだろう。SOV言語である日本語の関連すると思われる例をみる分析すると、その予測がおおむね正しいことがわかる。

まとめ

本稿では、EPPが(2)のような音韻的動機付けを持つことを主張した。近年のEPP効果を[EPP]素性なしに説明しようとする試みとして例えばLabelling Algorithm (Chomsky 2013, 15 et seq.)とKitada (2019)のMinimizing Externalization Hypothesisがあるが、本稿の主張は、EPPを音韻インターフェイスでの解釈に帰すという点で後者に近いと言えよう。

参考文献 (一部) Chomsky, Noam. 1982. *Some concepts and consequences of the theory of government and binding*. MIT Press. Chomsky, Noam. 2013. Problems of projection. *Lingua* 130: 33-49. Dobashi, Yoshihito. 2020a. *Externalization: Phonological interpretations of syntactic objects*. Routledge. Kitada, Shinichi. 2019. Daimeishi shugo shooryaku no saikou. Handout distributed at the workshop “language variation under externalization” at the 37th meeting of ELSJ, Kwansai Gakuin University. Radford, Andrew. 2009. *An introduction to English sentence structure*. CUP.